

看護教育における海外研修の位置づけ 国際看護学の視点から・3

タイ，ラオス専門教育のなかの海外研修 国際看護学実習

佐山理絵・高木廣文

看 護 教 育

第50巻 第3号 別刷

2009年3月25日発行

KANGO-KYOIKU (The Japanese Journal of Nursing Education)

Vol.50 No.3/MAR 2009

医学書院

タイ，ラオス 専門教育のなかの海外研修 国際看護学実習

佐山理絵 東邦大学医学部看護学科国際保健看護学研究室
高木廣文 同教授

この連載は、新カリキュラムにおいて「国際看護学」が導入されるのにもない、教育のなかで「海外研修」を重視して取り組んでいる大学・学校を取り上げ、その内容と取り組む意義などについてご紹介いただくものです。

はじめに

看護職の国際的分野における活動というと、災害緊急援助や、途上国での技術移転などの国際支援活動が想起されることが多く、特別な場所や機会という印象があるように思う。しかし、外国人看護師受け入れや在日外国人の増加にともない、看護職を取り巻く環境は大きな変化が予想される。例えば、本邦での看護の現場において、外国人患者を複数受け持ち、さらに、同僚の外国人看護師と今日のケアについてカンファレンスを行う、という場面が日常のこととなる日も遠くないだろう。そうした看護の国際化に対応できる看護職を育成していくことが、これからの看護教育の重要な課題である。

東邦大学医学部看護学科は、その特色ある教育の1つとして、教育目標に「豊かな国際感覚と国際文化に関する幅広い知識を具え、将来国際医療活動の向上に貢献できる人材を育成する」と掲げており、前身である東邦大学医療短期大学時代より、国際感覚を育成するための教育や教職員の国

際交流活動を活発に行っている。ここでは、海外で実施しているプログラム、特に専門領域科目として展開する国際看護学実習を紹介する。

本学における海外研修

本学では、学生の関心や各自が考える必要性に合わせて選択できる複数の海外研修を行っている(表)。このなかで「海外研修(ヨーロッパ研修)」と「夏期英語集中講座」は短大時代から行われているプログラムである。前者は、各国の史跡や美術館を見学し、さらにフローレンス・ナイチンゲールの足跡を辿りその業績を知ることによって近代看護のあり方を学ぶものとなっており、後者は、実践的英語能力を習得するために英語集中講座やホームステイを行う。両者とも、研修内容に関心をもつ学生が自由に選択でき、学生は研修参加と合わせ、事前学習やレポートの作成なども行い、単位が認定されるプログラムである。

また新たに、2008年からタイ・チェンマイ大学における学生交換交流研修プログラムを開始し

表 東邦大学医学部看護学科の海外研修一覧

科目名 など	単位	対象者 (数は学生のみ)	実施 期間	実施国	備 考
国際看護学 実習	2	4年生 国際看護学卒研 生5名 卒研究生以外9名	10日間 7日間	タイ ラオス	2グループに分けて実施
海外研修 (ヨーロッパ 研修)	2	1・2・3年生、 教員等 24名	13日間	トルコ、英国 イタリア	ナイチンゲールの足跡を 辿る旅
夏期英語集 中講座	2	学部学生、教員 等 14名	4週間	カナダ	ホームステイとヴィクト リア大学での英語研修
国際交流 研修	なし	2・3・4年生 4名	9日間	タイ	チェンマイ大学看護学部 との国際交流研修

(注)2008年中に実施した海外研修。

た。これは、2008年3月に本学とチェンマイ大学看護学部が国際交流協定を結び教育、学術交流を開始したのに伴い実現したプログラムであり、初回である2008年は本学から4名の学生がチェンマイ大学での研修に参加した。タイの保健医療や看護について学ぶとともに、学生寮に宿泊し、現地の大学生と文化交流をもつことができるプログラムである。

そしてもう1つが、今回詳しくご紹介する国際看護学実習である。

国際看護学実習の実際

本学では、2006年、国際看護学教育を専任で担当する国際保健看護学研究室が設置された。学部での国際看護学教育は、2年次の「国際看護学Ⅰ(必修)」, 4年次の「国際看護学Ⅱ(選択必修)」, 「国際看護学実習(選択必修)」, 「卒業研究(選択必修)」で構成されている。「海外研修」「夏期英語集中講座」「国際交流研修」は、一般教育領域および課外活動であるが、専門領域の科目として海外研修を行っているのが「国際看護学実習」である。

以下に、国際看護学実習の概要と2008年の実施内容について述べる。

概要と学習目標、履修学生

国際看護学実習は、「国際看護学Ⅱ」と関連し、国際看護学の概念と方法、途上国の保健医療問題、異文化看護など、選択する学生の志向する課題を実践的に学ぶことを目標としている。具体的な内容は、選択する学生と検討のうえで決定するものであるが、2008年の実施は、国際看護学を卒業研究の課題として取り組んできた卒研究生と、国際看護学

実習のみを選択する学生では学習習熟度や関心に違いがみられたため、別プログラムで行うことがより効果的であると考え、2グループに分けて行った。

履修したのは、4年次生14名(卒研究生グループ5名、卒研究生以外グループ9名)である。

実習内容

1) 卒研究生グループ

3年次後期よりゼミナール形式で看護研究、国際看護について段階を追って学び、研究を遂行するという目的をもった卒研究生のグループである。学生の研究課題は、すべてタイに関するものであったため、タイでの実習実施とした。訪問先は、それぞれの研究課題に基づき、情報収集や調査が行える場所に加え、タイの保健医療、看護について幅広く学ぶことのできる場所を選択した。

国際交流を行っているチェンマイ大学看護学部では、国際交流を担当する学部長補佐からチェンマイ大学看護学部の教育に関する講義を受けた。文化活動や地域との交流など専門教育以外の活動も重視しているという特徴を学ぶとともに、実習室や学生寮など構内の見学を行った(写真1)。

また、北部のパヤオ県では、保健局や病院を訪問し、タイにおける伝統医療の位置づけや病棟の

様子、看護師の活動からは異文化における医療観、看護観などを学んだ。また、職業訓練を行う高等教育機関である技術短大を訪れ、同年代の学生と触れ合う機会とした。首都バンコクでは、バンコク病院メディカルセンターで最新の設備を擁する私立病院を見学し、在外邦人向けの保健医療サービスについて学んだ。

実習のコーディネートおよび通訳をパヤオ県保健局のスタッフに依頼し、学生は、通訳と英語で直接コミュニケーションをとりながら実習を進め、教員はサポートが必要な時にかかわるようにした。また、寺院や市場などを訪れ、地元の人が利用する食堂で食事をとり、人々の文化や生活に触れることを大切にした。

2) 卒研究生以外グループ

卒研究生以外グループの実習実施国は、当初より、教員が研究フィールドとして継続的にかかわりを持っているラオスを計画していた。卒研究生以外グループの学生は、卒業研究はほかの研究室に属しているが、4年次の選択実習として国際看護学実習を選択した学生である。その選択動機は、卒業前に海外の状況に直接触れてみたいというものや、将来、国際的な現場で看護活動をすることを目標にしている学生など、さまざまであった。そこで途上国における保健医療看護を学び、さらに

日本人による国際協力支援や国際看護活動を学ぶことができる場所として、ラオスでの実習催行を決めた。

実習開始3か月前より事前学習を定期的に行い、ラオスの歴史、文化、保健医療、看護などについてまとめたものを共有し、理解したうえで渡航できるようにした。実習では、ラオスの医療の中心となる総合病院や、地域医療を担う郡病院などさまざまなレベルの施設を訪問し、日本とは異なった様相の保健医療問題や具体的な活動について現地職員から説明を受け、途上国の保健医療を学んだ(写真2)。また、国立マホソット病院や看護学教育を行っている医療技術短大を訪問した際は、相互交流として、学生が事前学習の一環として準備した「東邦大学における看護学実習」というテーマのプレゼンテーションを行い、現地の教員や看護師と意見交換を行った。

さらに、国際協力事業団(以下、JICA)ラオス事務所やJICAの看護助産人材育成強化プロジェクトを訪問して日本の国際協力や技術支援について学び、活動中の青年海外協力隊看護師隊員から話を聞くなど、日本人による国際看護・国際協力活動の実際に触れた。

タイでの実習と同様に、実習中は現地の文化や生活に触れる機会を多くもつようにした。実習のコーディネートおよび通訳は、国立病院の看護部



写真1 タイ・チェンマイ大学教員から実習の説明を受ける



写真2 ラオス・郡病院訪問

スタッフに依頼し、学生は主に英語を用いて、実習を進めた。

■レポート

実習の総括として、各国の文化、宗教、気候、生活、保健医療、看護といった要点を含むレポートをグループで1編作成し、事前学習や実習中に実際に触れて学んだことを概観するものとした。また、個人課題として、「異文化看護、国際看護とは」というテーマで、異文化や他国の保健医療事情にふれた国際看護実習を通して学んだことや文献等から、各自が考える異文化看護、国際看護について論じるものと、実習を通して感じたこと、印象に残ったこと、将来への展望等、自由に記述するものの2編を作成した。

■今後の課題

タイ、ラオス両国とも、実習は主に英語を用いて行われた。学生の語学の習熟度はさまざまであり、闊達に質疑応答を行う学生がいる一方、専門用語が多用される場面などでは理解しきれていない様子の学生がいたことも事実である。必要時は教員がサポートし、実習後には、レポートの作成を通してグループ内で学びの共有を図ったが、専門領域の科目として展開する以上、実習での学びが使用する言語によって制限されてしまうことのないよう、今後検討していかなければならない。

また、国際看護教育の学習目標や内容は、担当教員の海外活動経験や専門性が色濃く反映される

現状があり¹⁾、本学においても教員の研究フィールドである国が実習国として選択されている。教員間の交流を行っている中国など、学生の関心や実習内容を考慮して実施国や地域の拡大、選択を考慮することが必要である。

おわりに

看護職の国際化が求められている現況に呼応するように、国際的に活動する看護職に関心を持って入学する学生は多く見られる。在学中も、語学力向上に努め、国際保健看護活動に関する情報収集を積極的に行うなど目標に向けて活発に活動している。こうした学生の関心、そして看護職を取り巻く環境の変化から生じる必要性を考慮し、今後も国際感覚を育成するためのよりよい看護教育を模索していきたい。

●引用文献

- 1) 吉野純子：国際看護教育の現状と課題. インターナショナルナースングレビュー, 29(4), 20-22, 2006.

●参考文献

- 1) 東邦大学医学部看護学科国際交流委員会：昆明医学院第二臨床医学院・東邦大学医学部看護学科覚書調印式報告書, 2008.
- 2) 東邦大学医学部看護学科国際交流委員会：チェンマイ大学看護学部・東邦大学医学部看護学科調印報告書, 2008.

佐山理絵 ● さやまりえ

〒143-0015 大田区大森西 4-16-20
東邦大学医学部看護学科

NURSING BOOK INFORMATION

医学書院

イギリスの医療は問いかける

「良きバランス」へ向けた戦略

森臨太郎

●A5 頁184 2009年
定価2,940円(本体2,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-00710-8]

ブレア政権時に保健医療改革が行われた英国。その渦中で周産期・小児医療の臨床医として、また政策担当者として英国医療に携わった経験をもつ著者が、感じたこと、考えたことを率直に綴った。特に英国の診療ガイドラインの作成過程にみられる方法論や医療者と国民の関係は、今後の医療のあり方を考える上で参考になる。最終章では、日本の医療を改善するための具体策を提言する。